

Title	台湾人の儀礼と「物語」(二)
Sub Title	Rite and'narrative' of Tiwanese
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.25 (2000. 11) ,p.1- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20001130-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20001130-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 台湾人の儀礼と「物語」(二)

野村伸一

## 目次

- |                       |                |
|-----------------------|----------------|
| I. 台湾の法師の儀礼           | 1. 功德          |
| 0. 台南の法師と道士           | 0 功德とは何か       |
| 1. 台南の法師林俊輝           | 1 死後のもてなし      |
| 2. 開基玉皇宮の「改運拝斗」       | 2 埋葬前の十界抜度     |
| 3. 東嶽殿の超度亡霊           | 3 功德の芸能性       |
| 4. 臨水夫人媽廟の法事 (承前)     | 解結             |
| 0 台南の臨水夫人廟            | 目蓮             |
| 1 人びとの来訪              | 仮面             |
| 2 櫻花樓                 | 2. 釈教の五七路      |
| 3 祭星求元辰               | III. 台南玉皇宮の祈安醮 |
| 4 治病祈願の疏文と誼子書         | 0. 醮のかたち       |
| 5 臨水夫人という女神           | 1. 祈案醮の事例      |
| II. 道士による死者の弔い (以下次号) | 2. 醮の芸能性       |
| 0. 種々の弔い              | IV. 釈教の普度      |

### 4. 臨水夫人媽廟の法事 (承前)

#### 0 台南の臨水夫人廟

台湾では男性は樹木から、女性は花から生命を得ていると信じられている<sup>48)</sup>。そこで女性が子供を望むとき、また健康がすぐれないとき、あるいは赤子の発育がおもわしくないとき、花を通した儀礼がおこなわれる。

その際、具体的には花の橋を通り、花を授かり、またイエに花を持ち帰って育てることがみられる。こうした行為は今日、台南では建業街にある臨水夫人廟 (臨水夫人媽廟)<sup>49)</sup>で典型的にみられる。そこで、以下では、まず臨水夫人廟についてその背景を概観し、次に実際の諸儀礼を追いつつ、それらが東アジアにおいて、どのような意味と広がりを持つのかを追究してみたい。あらかじめいえば、ここにみられる「生命の花」の観念は濟州島や日本においてもさまざまなかたちで伝承されていた。そして、それらは根を同じくするものといえるだろう。

## 台南の廟

台南市は、現在、人口726,007人、戸数228,800、面積175,645キロ平方メートル、主要産業は農漁商工<sup>50)</sup>で、規模では台湾第四の都市とされる。ただし、1885年までは台湾の首府があったところで、当時まではまさに政治・経済・文化の中心地として知られていた。日本の統治時代、政経の中心は台北に移ったが、現在なお、台湾社会を動かす太い人脈は台南に通じるともいわれ、また台南出身者の文化的な矜持は並々ならぬものがある。

ここは古都の趣をたたえている。古い町並みがよく残り、そのあいだに多数の寺廟が調和している。人びとの寺廟詣では日常頻繁であるが、そのかたちにはごく自然な雰囲気がある。人びとは、まるで日々のあいさつをするかのような感じでやってきては祈り、去っていく。

『台湾廟神大全』（1985年）によると、台湾市内の寺廟数は215、また1999年9月に筆者が現地の媽祖廟関係者を介して台南市政府に問い合わせたところでは267であるが、このなかには土地公廟や有応公廟（無縁仏にあたる霊をまつた小祠）など、いわゆる路傍の廟や個人の神壇などは含まれていない。これらを含めると、この倍以上の数になるだろうと考えられる。

こうしたなかで女性の信仰をとくに集めるのが臨水夫人廟である。この名の廟は台湾全体ではそれほど数多くはなく、台南市内においても人びとのよく知っているものはひとつだけである<sup>51)</sup>。ただし、女性を対象とした廟がここにしかないというわけではない。台湾の女性は、一般に子宝を願うときは、註生娘娘<sup>52)</sup>というカミのもとへいく。台南においても同じで、この註生娘娘のほうはいたるところにまつられている。

次に安産を願うときになると、**臨水夫人**がとくに選ばれる。そして子供が生まれたあとでは、七星娘娘というカミのところへいく。このカミには特に16歳にいたるまでの子女の成長を祈願する。こうした各段階に応じる三種の女神を一廟にまつるところとしては台南市中山路の開隆宮が名高い。

ただし、女性たちがいつもこのようにきちんと拝み分けをしているかというと、決してそうではない。わたしは臨水夫人廟で何日間か、さまざまな女性の祈願を観察した。その結果わかったことは、ここではさまざまな祈願がなされているということであった。既婚の若い女性が子を望むのはいうまでもないが、そのほか、女神のおかげで妊娠したことのお礼参りもある。また、赤子が病気がちなので**関煞**（身に取り憑いて災いを引き起こすもの）を除去してもらおうとか、あるいは子供がかなり長じてても、なお精神が定まらないというので元辰（元神＝元氣）を活性化してもらおうことなどがみられる。

## 台湾人の儀礼と「物語」(二)

元来、産を助けるカミであった臨水夫人の前で関煞を取りのける類の儀礼、つまり治病儀礼をなぜするのか。これについて、林俊輝道士は「臨水夫人がみまもってくれるので」といった。臨水夫人は、その生涯の伝承をみると、白蛇の精などの妖怪を除き、また旱魃による人びとの苦しみを除くために、祈雨の法を実践し、雨を降らせている。すると、この廟で諸種の治病儀礼をし、人助けをするのはむしろカミの意にならなっているということになる。

ところで臨水夫人というのはどういう女神なのか。いつごろからどこで信仰されはじめたのか。日本はもちろん、中国内でもあまり知られていないので、これについてももう少し、詳しく探してみたい。

### 臨水夫人の生涯

臨水夫人の伝承は清朝のはじめごろにできたかとおもわれる<sup>53)</sup>『臨水平妖伝』という書の冒頭の解説<sup>54)</sup>に記されている。

本名は陳靖姑。唐の天佑2年(905)、1月15日に、福建省福州の下渡で生まれた。その生涯は『閩都別記』<sup>55)</sup>によると、生まれたとき、景雲が部屋を覆い紫気が庭に盈ちた。幼くして聡明で賢淑、端莊であった。13歳のとき、閩山の許真君の門下にはいり道法を学び3年間で学を成した。帰郷してから親の薦めを入れて古田県の劉杞公のところへ嫁した。そしてこの地で閩山の法を発揮して、ときの魔精を攝伏し、人びとの厄難を救った。

陳靖姑が24歳のとき、大旱魃が生じた。懐妊中の身であったが、これを除くべく、奮然と脱胎し、祈雨の法を施して雨を降らせた。しかし、仇妖の乗ずるところとなり、尸解し、帰天した。ときの人は陳靖姑のために古田に廟を立て、これをまつた。そののち夫人の英霊はふたたび閩山に赴き、救産保胎の術を学んだ。そして救産扶嬰、治病驅邪の誓いをたて世人を濟度した。

以上が『閩都別記』の内容である。つまり清代において信じられた伝承である。そして『臨水平妖伝』の解説はつづけて、この人の霊が世に顕れ、宋、元、明を経て清のはじめに臨水夫人としてまつられたこと、また閩(福建)の人びとは臨水陳太后と称していることを述べている。

一方、このカミは一般に三奶夫人としてまつられる(図版47)が、そのいわれについても説いている。すなわち、陳靖姑は生前、多数の仲間と姉妹の関係を結んで人びとを救い濟世をおこなった。そのうち李三娘と林九奶を合わせて、閩南と台湾の人士はこれを三奶夫人というのだと<sup>56)</sup>。

陳靖姑の死後の靈験が顕れたものとしてよく知られているのは次のような話である。すなわち、ある女性が妊娠して17ヶ月になったのに子が生まれぬ。そこで祈ったところ、陳靖姑が現れて治療をした。するとその女性は蛇数斗を生んだが、女性には何ら障りがなかった。また古田に白蛇洞という洞穴があった。ここの大蛇が付近の人びとを苦しめていた。ある日、赤い衣をきた女が現れ、その大蛇を斬り殺した。ムラ人が名をきくと、福州の下渡の陳昌のむすめだといって消えた。そこで人びとはこの白蛇洞の上に廟を立てて陳靖姑をまつた。このゆえに臨水夫人といわれる。別伝では、古田県の臨水洞でカミになったので臨水夫人というのだと<sup>57)</sup>。

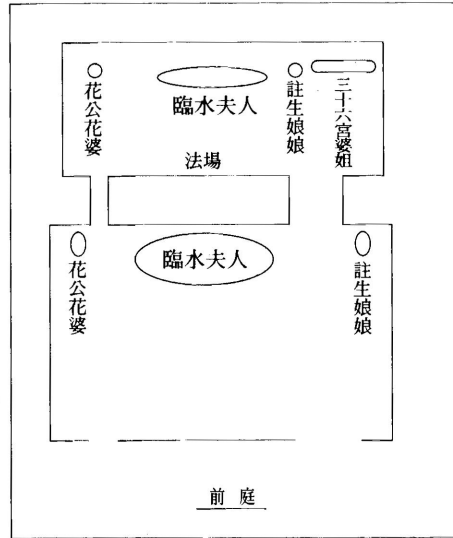
これらを踏まえると、臨水夫人とは、10世紀のはじめごろ、福建省の古田で活躍したカミに仕える女で、死後に地域の人びとに崇拜されて大きなカミとなったということになる(唐の大歴二年〈767〉生まれという伝承もある)。陳靖姑伝承は明清代に成長したため、美化されていく。明の万暦年間の『道蔵』に記載された臨水夫人になると、すでに道教の仙霊とされていた。すなわち、陳靖姑は嫁さずして死去した。あるいは童子によりついでものをいう。人びとが水を請い、禍福に関連して祈願すると靈験がある。それで廟を建ててまつたのだと<sup>58)</sup>。道教がこの女神を取り込んだことは明白で、そのおかげもあって信仰は広がったのだろう。

しかし、一方で、そのイエは代々巫師であったという『古田県志』の伝承もある<sup>59)</sup>。こちらのほうがやはり先であろう。そしてこの女神のもとでおこなわれる儀礼の核心は古田あたりの民間信仰を反映したものだったと考えられる。その地方の女性たちは、元代以降のことだが、臨水夫人の像を閨房に掛けて子供を授かることを祈った。また自己の順産や産後は子供に福を授かること、さらに、およそ一切の災いよけを祈った<sup>60)</sup>。こうした家庭の信仰があったためであろう、臨水夫人廟は明代にあってなお、儒者により「淫祠」として批判されることもあった<sup>61)</sup>。

福建省における臨水夫人廟は閩東、閩中を中心としていて、他の地方にはあまり広まらなかった(分布だけでいえば福建・浙江・江西にみられる)。そしてこの地域の人びとの台湾への移住がさほど多くなかったため、台湾全土においても廟の数は少ない。しかし、臨水夫人信仰の根柢には閩一帯に古代から広がる「母親崇拜」<sup>62)</sup>があり、この基盤の上に媽祖も臨水夫人も崇敬されたとみるとき、その意味の大きさはおのずと推測される。ここには、福建の一地方信仰というだけでは片付けられないものがある。

台南市の臨水夫人廟　台南の臨水夫人廟は1736年に福州人がここにきて臨水夫人を主

神として小廟宇を建てたのにはじまる。そののち、1852年に林紗娘(林九奶, 林九娘), 李三娘を加えて建て替え, さらに幾度か重修した。現在のものは1983年に作られた(前号, 図版4参照)。三奶夫人のほかに, 註生娘娘(図版48), 花公花婆(図版49), 大聖爺(丹霞大聖, 孫悟空), 福德正神(土地の守り神), 三十六宮婆姐(図版50)などをまつる<sup>63)</sup>。現在の廟は右図のような構造である。これをみればわかるように, 数年前に新しい廟宇を立てたのに伴い, かつての神像をさらに奥の空間にまつたので, 二重の構造になっている。各種の法事は奥の空間でおこなう。



▲臨水夫人廟略図

### 1 人びとの来訪

臨水夫人廟は正式には臨水夫人媽廟とよぶ。「媽」は母親を意味する敬称である。なるほど, この廟にいて長い時間過ごしていると, 赤ん坊を抱いた母親, あるいはやがて母親になるはずの女性たちが引きも切らないことにおどろく。カミも参る人びともまさに「母親」で, その横顔だけみても, 生きようとする力にあふれている。

ここにくる大半の女性は, 金紙<sup>64)</sup>を買って, 臨水夫人にお供えし, 祈願して帰る。これらの人の多くは, 念のため, あるいは日ごろの習慣で参るので, まだそれほど差し迫った事情はないのだろう。ただし, 人びとは廟にはいると, すぐ目の前にある臨水夫人に祈るばかりか, 必ず奥の空間の古い臨水夫人の像にも祈願をしていく。台南の廟まわりの人びとはとにかくそこにあるだけの神がみに向かって恭しく参拝していく。重複があろうとなかろうと, 神像が大きくても小さくても祈願するときのカオは同じで敬虔である。

ところで, 奥の空間にきて林俊輝に法事を依頼するばあい, 話はどのように進められるのだろうか。一般には次のようなかたちで法事をするか否かが決められる。

まず, すでに結婚して子供も生まれたけれども, その子の成長ぶりがおもわしくないのだから相談するというばあいがある。あるいは子供がまだないので, 子が授かるようにしてもらいたいと依頼したり, またすでに妊娠したのだが, どうしても男の子がほしいというこ

ともある。

こうした依頼に接すると、林俊輝はまず第一に、生年月日、生まれた時間を尋ねて、当人の四柱八字をみる（前号、図版5参照）。林俊輝の手元には『呂逢元通書便覧』（聚福堂）という名の通書があって、これを基に各種の運を割り出す。そして子供のない女性に対しては「有子命」をみる。これは男の子を持つ運命にあるかどうかをみるもので、ないこともありうる。あいにくこの卦がなければ、林俊輝は法事の依頼を断る。

一方、「有子命」の卦があるばあいは、どういった種類の法事にするかを定めることになる。梗花糺、換花（裁花換斗<sup>65</sup>）、祭元辰などがあり、その一覧は林俊輝の座る椅子の背後に表となって掲げられている（「0. 法師と道士」の項も参照）。

ところで、ここですぐ決定となるのではない。臨水夫人に対して法事の許可を得る必要がある。このとき、林俊輝は入口正面の臨水夫人像の前に依頼者を連れていく。そして金紙を買って奉納することを勧めた上で、占いをする（この金紙代は廟の収入になる）。陰陽の卦が3回つづけて出ればカミが許可をしたことになる。

カミの許可が得られると、次には、法事の規模を話し合う。同じ儀礼でも経費の多少により時間も用いる衣装もだいぶ異なる。そして、いつ、何人ぐらいの法師でやるか大まかな合意ができると、ふたたび臨水夫人に伺いを立てる。ここで許可が得られると、依頼者はいったん帰る。そのあとは本人の決断である。正式に依頼することに決めると、ふたたびやってくる。

だいたい、こうした手順で法事が決まるので、ここには童乩などが介入する余地はない。ここが死者霊供養の「超度亡霊」すなわち打城とは異なるところである<sup>66</sup>。さて、林俊輝本人の教示によると、花にかかわる儀は次のように進行する（後述の事例および図版51以下も参照のこと）。

### 1. 請神・浄壇

### 2. (探花朶)

花の枝を探ることである。要するに個々の女性はみな陰間に花園を持つとされるのだが、その花園のようすをさぐりにいく過程を意味する。ここでは「落花園探宮糺」という科儀書<sup>67</sup>が読まれたのだが、時代に合わない<sup>68</sup>とのことで、すでに20年このかた、この段は省略されている。

### 3. 祭花糺

祭関煞

## 台湾人の儀礼と「物語」(二)

花園を象ったものをまつる。また本人が白虎、天狗など各種の関煞(厄)に犯されているときはこれを象ったものを卓上に置いてまつる。

### 4. 造百花橋

細長い腰掛けの上に黒い布を掛け、橋にみたてる。そしてこの上に蛇を模した法索を置く。道士または法師が剣を持ってその周囲を浄めていく。

### 5. 改厄

#### 花脚枯走黄蜂

関煞を象ったものを打ち壊す(改厄)。そしてまた花園を象ったものを依頼者に持たせ、そのなかに害虫のせいで弱った花<sup>69)</sup>があるとして、これを取り除く。

### 6. 梗花様

#### 裁花

#### 換花

臨水夫人の像に向かって花園を強化するための科儀書が読まれる(梗花様)。そして花瓶に活けてある実際の花が切り取られ依頼者の頭にかざされる(裁花)。また、道士の仕様そのものは同じであっても花を取り替えて頭にかざしてやることもある(換花)。

### 7. 進銭補運

臨水夫人やその他の神がみに紙銭を献上し、依頼者の運数をよくすることを祈願する。

### 8. 謝壇

以上が基本であるが、この間に改運の儀礼(改運拝斗)が挿入され、より大きい規模でやったりもする。

## 2 梗花様

1998年3月8日の夕刻、わたしは臨水夫人廟で林俊輝道士のおこなう「梗花」の儀をみることができた。小法事で2時間余りの儀礼であったが、果たして、生命の根源としての花に対して台湾の女性たちがいかに共感を寄せているか、そうしたことをつくづくと考えさせるものであった。やることは簡単だが、花をめぐる諸種の儀礼に込められた意味はなかなか奥が深いといえるだろう。

### 花様について

既婚の女性で子供が授からないのは、陰間にある、その花様(花園)の養分が足りない



からである。これを強くさかんにするのが梗花の儀である。だから、これは**梗花櫛**ともいう<sup>70)</sup>。女性には花櫛があり、男性には樹櫛がある。女性のからだが強ければ花櫛が、男性のそれには梗樹櫛が必要である。しかし実際には男性のための梗樹櫛の儀はほとんどおこなわれない。

この世で花を育てるには土と水が必要だが、三奶夫人は米の盆の上で花を育てたという。それゆえ、この梗花の儀では、米の盆の上に置かれた花櫛（図版 51）を強化したあとで、「栽花」がおこなわれると、それがすなわち子授けの儀となるのである。今回の儀はこれに当たる。

### 依頼者

依頼者は 30 歳になる既婚女性 A さんで以前に一度流産の経験があった。それ以来、子供が授からず、健康状態もあまりよくないことから、母とともに臨水婦人廟にやってきた。ふたりは子供を祈願するだけでなく、みずからの健康をも祈願した。

### 梗花の次第

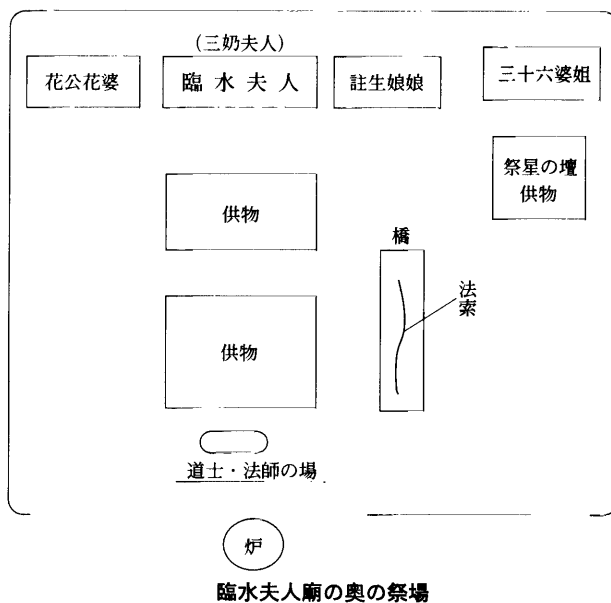
この儀は請神・浄壇からはじめて先に概観したとおりの次第で進められた。その内容は次のようである。

#### 請神・清壇、祭花櫛、祭関煞

助手の曾文徳が頭を紅い布で包んだ「紅頭法師」のいでたちをして臨水夫人に向かって立つ。背後には依頼者の母子が立っている。法師は暗誦した唱えごとで諸種のカミ、

将兵をよび、金古紙に火をつけ、これで祭場を浄める。

次に、右側に移動して、やはり曾文徳が臨水夫人の部下となった三十六婆姐、大聖爺（孫悟空）の神像に向かって（図版 50 参照）、花櫛および関煞をまつ。これらは科儀書の読誦を中心にしておこなわれる。関煞とは科儀書によると、各種の「星君」であり、こ



の段はまた「祭星君」とか「祭関限」ともよばれる。

祭場にはすでに橋が用意されてある。橋は腰掛けの上に黒い布を覆うことで即席にできあがる。その上には法師の用いる法索が置かれてある。法索は騰蛇<sup>タンサ</sup>ともいう。蛇の頭を付けた縄鞭で、のちにこれが煞を打ち払うのに活用される。林俊輝道士によると、この鞭はまた金鞭聖者ともいう。蛇の頭の方向が橋頭、尾のほうが橋尾となる(図版 52)。

#### 造橋過限

林俊輝道士が七星剣を持って道士の独特の歩みである罡を踏みつつ舞い、橋の周囲を右回りに三回巡る(図版 53)。五方に向かって聖化するもので、舞剣と噴水(口に聖水を含んで吐くこと)をくり返す。

五方すべてに向けて聖化が済むと、道士は橋のたもとに立つ。そして、牛角(龍角)を吹いて、橋造りが終わったことを天に告げる。このあと、脇に立って見ていた A さんと母親が橋のところによばれる(図版 54)。

ふたりは林道士に導かれてまず、橋の周囲を、それから橋の上を通過する。ふたりと道士のあいだを法索がつかないでいる。これは百花橋まで道行をし、やがて百花橋を通過することを意味する。同時に、次の改厄の前提となる。A さんは身代わりの人形(替身)を衣服で包み込んだものと線香を両手で持つ。この橋を通過することは、A さんや母親の「花園」がこの橋とかかわることを意味するのだろう。いや、観念的には、女性の花園はここにあるのだといえる。付き添いの母親もみずからの健康増進のために橋を渡るのだといった(図版 55)。とにもかくにも、ふたりの女性はみずからの花園にいきついたのである。

#### 改厄

百花橋を通過したあと、A さんは百花橋の端に腰をおろす。ここで A さんは道士から、「関煞」を象ったものを渡される。ここから「犯関」を取り除く儀がはじまる。A さんがこれを膝の上で抱えているあいだ、道士は唱えごとをし、次に七星剣で関を破り、そのなかにあらかじめ入れてあった替身を取り出す(図版 56)。そして道士は人形を手を持ち、これを振り、A さんの口元に当てる。A さんは道士に命じられてハーッと息を吹きかける。これで A さんは体内に溜まる悪しき気を人形に向かって吐き出したことになる。このとき、林俊輝は法索をしきりに振り回して地をたたく。そのピシッとした鋭い響きはひじょうに印象的で、いかにもこの周囲に漂う悪しき気を追い払う感がある。

次に、助手の曾文徳の立ち合いのもと、Aさんは夫の上着を両手で広げて、厄除けの儀を施してもらった。このときも夫の代わりとなる人形が活用された（図版 57）。このとき、曾文徳も法索をたくみに振り回して地をたたき押煞をする（図版 58）。

#### 花脚枯走黄蜂

次に林俊輝道士はAさんに花公花婆のつかさどる花様を持たせる（図版 59）。そして本人と母親のみまもる前で蜂や蝶、天狗の取りついた花を折り曲げ、花園を整えたことを確認させる（図版 60）。これがあったため流産もしたということなのであろう。

#### 梗花、裁花

道士は花様を臨水夫人の前の卓上に置く。そしてAさん親子を促して場所を移動させる。Aさんは、正面に臨水夫人を拝む位置にすわる。そしてこのあと、林俊輝は、Aさんに花様を持たせ、祝福のことは与える。それは、梗花様の科儀書に従っていて、一年十二ヶ月にそれぞれ特定の花があること、花をだいにすると、五男二女にめぐまれることなどの内容である（図版 61）。また「天狗や白虎、紅目、缺嘴…独脚…奸臣」のようなむさくるしい、嫌なやからがAさんにまとわりつかないようにといった内容の呪言もあり、これをきくと、Aさんと母親はおもわず笑い出してしまう（図版 62）。

林道士はひとしきり笑わせたあとで、仕上げの裁花の儀を施す。これは文字どおり花をAさんに授けてやるもので、本物の花を折り取ってきてはAさんの右耳の上にかざしてやった。花の数は特に決まりはないが、中国社会でも好まれるのは「一姫二太郎」ということで、赤い花が一つ、白い花が二つ、かざされた（図版 63）。

#### 送花、進銭、祈福

花を授かったAさんは花様を祭壇の上にもどし、神がみへの感謝の意味で金紙の施しをする<sup>71)</sup>。一方、そこには鉢植えの芙蓉が置かれてあった（図版 64）。道士はこれをAさんに授ける。芙蓉は同音の「扶陽」を意味し、これをイエに持ち帰り、育てることを勧める。陽を扶助して子供を得るようにとの意味からである。

#### 百花橋の儀の広がり

梗花様の儀がおこなわれた翌日、3月9日にも、これと似た儀礼がおこなわれた。ここでは1歳ほどの赤子を連れた若い母親がきて、子供の発育を祈る儀礼をした。

林俊輝によると、その儀に特別の名称はなく「小孩祭関煞」と「添加元気」を組み合わせたものだとのことである。これも2時間ほどの小法事で、それは

請神・清壇——祭関限——造橋過限——改厄——梗四柱——梗元辰——祈福——謝壇

という次第であった。

曾文徳による「請神・清壇」は型どおりであるが、この冒頭に依頼者の関係者が「禪師菩薩」を神輿に乗せてかついできて、その加護を祈願したのは前日とは違うところであった(図版 65)。

この次に「祭関限」とあるのは祭星のことである。曾文徳はうしろに母子を立たせて、天狗や白虎、太歳、五鬼など関煞を意味する各種の星君をよび、供物を献上する。これをもって依頼者の身に災いをおよぼすことなく諸星君に帰ってもらおうとする。

次の「造橋過限」は林俊輝が担った。やりかたは梗花穢の項で掲げたものと同じで、橋の周囲の浄化があり、次いで母親そして赤子が道士に導かれ橋の上を通過する(図版 66)。

赤子の「改厄」は形式はおなじだが、厄の除きかたは前日といくらか違っていった。すなわち、百花橋の端に母親と子供が腰かけると、道士が刀で関を破り、替身を取り出す。ここまでは同じだが、このあと、道士が10センチほどの長さの模造の弓箭を取り出し、これを七星剣で断ち切った。これが「抽刀箭」で子供の厄除けではしばしばおこなわれる(図版 67, 図版 73 も参照)。

林俊輝によると、子供のからだのなかにはいくつもの関煞がある。そのうちのひとつが「將軍箭」<sup>72)</sup>であり、これは祖父母を死に至らし、父母を損ない、さらに自分や兄弟をも病まして死に陥らせる危険なものなので、これを除去する儀をおこなうとのことである。さらに、道士は、泣きじゃくる赤子の手を引き、その爪に剣先を立てた(図版 68)。これは、子供の身体中にたまった悪しき気を爪のあいだから発散させるとのことであった。

次の「梗四柱」「梗元辰」は臨水夫人に向かう位置に場所を移しておこなわれた。卓上には四柱亭と十二元辰の象徴である赤い十二個の饅頭および光明燈を意味する七本の蠟燭がみえる。四柱亭のなかには米が盛られ、また鏡も置かれてある(前号, 図版 24 参照)。この鏡を使って林俊輝は太陽光を反射して子供の顔を照らした。これは活力を高める意味があるのだろう。

林俊輝は臨水夫人に向かって、赤児の元辰を盛んにするべく祈願の唱えごとを奉り、それが終わると、赤い紙に何やら墨書したものを読み上げ、これを畳んで子供に持たせた。

そこには、この赤子を神々の孫にすることを認めるといった内容が書かれてある。これを「誼子書」という(図版 69)。<sup>73)</sup>そして最後に、子供の首に首飾りをさげてやった。これはお守りであろう。このときには、むずかっていた子供の機嫌もすっかりよくなっていた。

### 3 祭星求元辰

臨水夫人廟では花に関連する儀礼だけでなく、上にみたような元辰を強化する儀礼もしばしばおこなわれる。以下の「祭星求元辰」は、上記のものと同様なのだが、ここでは25歳になる青年が当事者で、そのため百花橋を通過する儀がなかった。このことは、百花橋の意味を改めて考えさせるものだが、そうした考察の前に、この事例を一応、確認しておきたい。

1998年3月16日、臨水夫人廟で「祭星求元辰」の儀がおこなわれた。直接の依頼者は中年の女性で、25歳の青年の母親であった。この青年は若いときに靈魂を失ったため、現在、精神が安定しないのだという(いわゆる知恵遅れのようなものである)。その回復のための儀礼として「祭星求元辰」が選ばれた。儀礼は次の構成で進められた。すなわち

浄壇・請神——祭星——祭関限、抽刀箭——梗四柱——梗元辰——謝壇

である。

一連の儀はすべて林俊輝が担った。冒頭の浄壇と請神では金古紙に火をともして神がみを招く(化紙請神)。あるいは帝鐘を振り(図版 70)龍角を吹く。

次に祭壇を変えて三十六婆姐に向かう位置に立ち、祭星、祭関限、抽刀箭をおこなう。卓上には限城(関煞)、白虎、五鬼、天狗を象ったものがみえる。林俊輝は科儀書を読みあげたあと、金古紙に火を灯し、これを掲げつつ斂払いの舞をする。そして依頼者の青年に限城を持たせる。限城の上には模造の弓矢が掛けてある(図版 71)。そして限城が開かれ(図版 72)、替身が引き出される。さらに弓矢が断ち切られ(抽刀箭、図版 73)、青年の体内にたまった「汚穢の気」が人形に吸収されて除かれる(図版 74)。

梗四柱、梗元辰は臨水夫人の前の祭壇にもどっておこなう。四柱亭のなかには依頼者の青年の代わりとなる人形がみえる。そしてこれを取り囲むように十二元辰の象徴である紅色の饅頭が十二個置いてある。七本の光明灯に灯りがともされ、青年の元辰の回復が確かめられる(図版 75)。

このあと道士は母親と青年を後ろに立たせて疏文を読みあげる。それによると、この青

年は20年前、病にかかり元神を失った。そのために災厄が生じているので、平安満福を祈るため、今、星君をまつって送り返すということである(図版76)。道士は疏文を読んだあと、点指(印)を結んで消災改厄を確実にする(図版77)。

以上で25歳の青年のいわば治病の儀が終わる。付き添っていた母親の表情は、いたいけな子を連れてやってくる若い母親たちのそれと違うところは少しもなかった。

#### 4 治病祈願の疏文と誼子書

臨水夫人廟ではもっぱら林俊輝が法事をしているが、他の法師たちもときどきやってきては法事をおこなう。そうしたなか、次の事例は赤児の治病儀礼の一つとして注目に値する。

**事例** それは、一見すると、よくある赤児のための健康祈願のようであった。若い父親が、生まれてからまだ何ヶ月もたっていない嬰兒を抱いて法師とともに臨水夫人の前にきていた(図版78)。普通の参拝では、ここで、法師が赤児の干支まにちなんだ動物の絵札を持ち、呪言を唱えて平安を祈願してあげる。そして法索を二三度振って祓いをし、また法索をもって赤児を撫でてやる。これは一、二分で終わる簡単なものである。ところが、1999年9月14日、林俊輝が「求子」の儀をしているのと同じ時間、そのすぐ脇でおこなわれたものは、そう簡単ではなかった。それは嬰兒の肥立ちがあまりよくないので、その原因を断つためにする「買断」の法事であった。

買断とは嬰兒の持つ前世の父母との縁を絶ちきる儀礼である。一般にこの儀礼が成立するまでの過程は次のようになっている。まず、親が子供の成長ぶりのおもわしくないのを気にかけて童乩のところへ相談に行く。そこで解決することもあるが、童乩には守護神がいて、そのカミが童乩の口を通して、子供の不調の原因は前世の縁によると告げ知らせることもある。今回のばあい、済公菩薩が童乩に懸かって、前世の父母とその背後にいる三十六婆姐が関係していることを知らせた。そこで、童乩は依頼者の意を受けて、なじみの黄沈財法師に依頼し、臨水夫人廟で買断の儀をすることにした。

儀礼は先に「百花橋の儀の広がり」の項(10-12頁)で述べたのと同様の手順に進められたが、誼子書のところが異なっていた。ここで比較のため、まず林俊輝の誼子書をおきたい。それは、子供の名前と住所を記したあと、依頼者の親子の名を書き、臨水夫人に対して供物、金銀財宝を献上することを誓う。そして子供の身の上に関煞、特に刀箭が及ばぬようにし、一家平安で子供も綿綿長成するよといった祈願を記す。これは二通

作成し、一通は父母が、もう一通は当該の赤児が持つことにする（図版 79）。

このかたちはもっとも一般的なもので通例、誼子書というのはこれを指す。ところで、嬰兒の治病を目的としたばあい、その契約書「買断字証書」（図版 80）はもう少し複雑である。一般に、この世に生まれ出た赤児には現世の父母だけでなく、「前世の父母」も存在すると考えられている。それは、どこのだれであるかはわからないが、とにかく前世にも父母がいて、しかも、その出生を助けた女神がいる。これが今回のばあいは「楊州府長者」なる父母と女神「婆姐」である。この婆姐は「三宮夫人」つまり臨水夫人の部下にあたる女神でもある。そして前世の父母である長者と婆姐が子供に対してかかわりを持ちつづけると、成長が妨げられ危険である。子供が現世から引き離されるかもしれないのである。

このことがわかると、現世の親は「楊州府長者」に対して「金銀財宝」を出して、子供を買い取ることにする（買断）。これには仲介者が必要である。その仲介をするのが済公菩薩を守護神とする紅頭法師であり、また、これらの内容を書面にして差し上げる対象は臨水夫人である。

以上のような内容を記した文書は、法師の儀礼にはよく用いられていたようである。かつて、可児弘明が台南の陳榮盛道士を介して入手し、紹介した「祈禳花児契書」も上に記したものと同じものである<sup>74)</sup>。

すなわちそこでは、幼児が「凶星関限雜煞」に遮られて、その成長が不順である。これはまた前世父母と十二婆姐<sup>75)</sup>のせいでもあろう。そこで仲介人を立て、陽州府の前世父母のところへいかせ、財貨をもって花児を買い取り、現世の父母に与えようとする。そのための「保命長生契書」を二通作成する。また無事、十六歳<sup>76)</sup>になったら、そのとき感謝の「演戯、設醮」をする。このことを「三宮夫人」（三奶夫人）や諸神に誓うといった内容の文書である。

#### 考察

上の可児の引用した事例について注目されるのは、この世に生まれ出る赤児が「花児」とされていることである。これは、明らかに百花橋および花園から送り出されたことを示している。同時に花を媒介にして生命が連鎖していることをこの上もなく明確に表現している。およそ、儀礼を施される現世の父母たちにとって、嬰兒とは、自分たちが耕して育てる作物の花とまったく同じようなものとして受容されていたに違いない。その嬰兒の成長には何よりも豊かな手入れのいきとどいた土壌がなければならない。つまり自分たちだ

けの営みで生み育てることはできないということなのである。

## 5 臨水夫人という女神

台南の臨水夫人媽廟を中心にしたいくつかの儀礼をみると、わたしには、臨水夫人と百花橋のかかわりがとくに重要なものとおもわれる。「百花橋」については、劉枝萬の引用した『臨水平妖伝』第十七回の次の箇所が印象深い。すなわち

死んで神になった陳夫人が、…ある日、ふと見知らぬところにやってくると、…下界では想像もつかない、すばらしい景色で、…黄金の河に、緑の水が流れ、虹のような橋がかかり、…色とりどりの花が咲き乱れていた。すると、突然ふたりの武神が現れて、「何者だ、百花橋へ闖入してくるとは」と怒鳴った。…「われは福州・下渡の陳靖姑ぞや」と陳夫人がいえば、…二神は聞くなり平伏して、「…ここは上界の百花橋でございます。下界のあらゆる赤子は、すべてここより出向いて誕生いたします」と説明した。陳夫人は大いに喜び、「…おふたりが我が教門に帰依なさるならば、自今、ここをわが駐泊所とし、ひとりはお盆もて子を送る高元帥と名乗り、ひとりの子育ての鄧大神と名乗り、わが義妹たちと百花橋を守られよ」と指示した<sup>77)</sup>。

この引用箇所および先述の花にまつわる儀礼からわかることは

1. 百花橋は花の咲き乱れる生命の源であること
2. 百花橋は上界（天と地のあいだ）にあること
3. そこは下界（人間界）とは異なること
4. 臨水夫人陳靖姑の以前に百花橋があったこと<sup>78)</sup>
5. 臨水夫人陳靖姑はその橋をみいだした者であること
6. 百花橋には嚴重に花を守るカミがいてここにはいるのは容易ではないこと
7. 百花橋の花園から生命が生じるのであり、そこがおそらく、仏教の極樂がはいつてくる以前の原初の他界であったとおもわれること

などである。

このことをさらに一般化するというならば、福建省において千年余り前に、もともと民間に漠然としてあった百花橋の存在を広く説いた者が現れた。それが陳靖姑とその仲間たち



だったということであろう。陳靖姑が道教の法に通じたとか、観音菩薩の化身だとかいうこと<sup>79)</sup>は、そのちに仏教、道教の影響が及んで伝承がふくらんだので、おそらくもとは巫の集団だったとおもわれる。ちなみに、福建省の研究者徐曉望も、このカミの原型を「難産で死んだひとりの女巫」だと述べている<sup>80)</sup>。

また、このこととの関連でいえば上記の伝承では、百花橋はふたりの武神が管理しているのだが、一般には花公花婆という男女が花の管掌者である。おそらく民間伝承としてはこちらのほうが古いものであろう。そして花公花婆こそは生命の元締めなのであり、それは大陸の儺戯などで崇敬される儺公儺母のような者、原初の夫婦であったと考えられる。それゆえ、裁花の儀のとき、「花穰」の両脇に花公花婆の姿が依然としてみられるのはより根元的な意味があった。かれらの存在は臨水夫人以前にあったので、消すことはできなかったのであろう。

ところで、花の橋に降り立った陳靖姑はその以前に一度、死んで昇天している。つまり清まった身となった。そしてその上で百花橋をみいだしたのである。一方、民間の花の儀では、この世の多少とも疲弊した身体を持つ女性たちが百花橋を通過し、その端のところ、身に付いた閑煞を改める。ここでは限城が打破され替身が取り出されるが、それは汚れを脱ぎ捨てることであろう。すなわち古い身体の死があり、そしてのち再生した身体は靈魂の居所である花園をみいだす（模造の花園を膝の上に抱える）。そこで、靈魂の活性化を意味する花の手入れの儀があり、さらには花園そのものの強化が呪詞を用いておこなわれ、最後に、新たなる生命の授与を意味する裁花の儀がある。

こうした儀礼を含む原初の花園の観念は濟州島の二公本縁譚や仏道ハルマン本縁譚の世界<sup>81)</sup>とも通じるし、また日本の奥三河の花祭などにおける新生の掬りどころとしての花<sup>82)</sup>にも通じるとみられる。濟州島の花畑には還生花だけではなく死の花、いさかいの花、滅亡の花もある。人びとに生命を授与する仏道婆さんは花育ての競争をして勝ったのだが、負けた女性クサムヌンは死を管掌する。これらは現実の花畑がそうであるように死（枯れた花）と新生（開花した花）がひとつところにあるという発想によるものである。一方、花祭の花についても、死と新生が隣り合わせに観じられていた。すなわち、奥三河の花祭をかつて同地でおこなわれた神楽にさかのぼらせるとき、そこには浄土入りによる仮死があり、そしてのちに生命の花を媒介として再生を得ていた。

こうした生命の連鎖にかかわる観念は東アジアにおいてはかなり根元的な民俗として存在していたとおもわれる。ところで、台湾における死者のもてなし方はどういったものなのだろうか。生まれ出る生命とどうかかわってくるのだろうか。このことをみるためには、

やはり葬礼全般について、みておく必要があるだろう。(以下次号、文中敬称略)

## 注

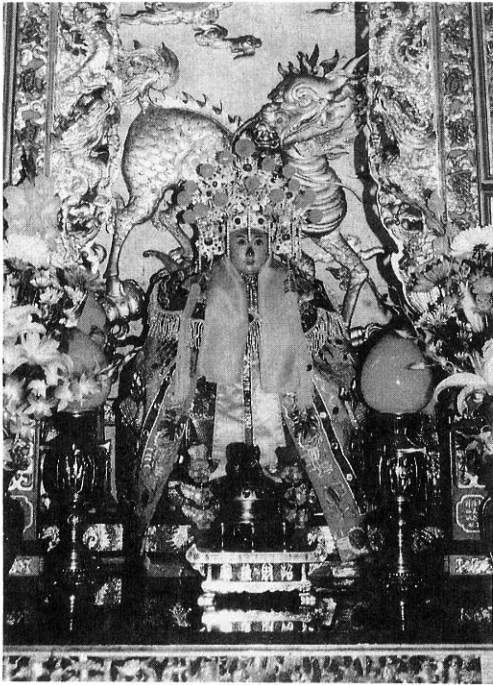
- 48) この観念は臨水夫人を奉じる三奶派の法師の科儀書によるものである。それがどのていどの広がりを持つのかは検証されていないが、一般にこうした観念が庶民のあいだで受容されていればこそ、多くの人たちがこの廟にやってきて儀礼を依頼するのであろう。科儀書は民間の習俗なしには成立しなかったはずである。
- 49) 「夫人」だけでも敬意がこめられているが、夫人媽はさらに敬意を示したことばとなる。廟発行の冊子などで正式によぶときはこのようにいう。ただし、以下では臨水夫人廟と記す。
- 50) 以上の数値は1999年9月に筆者が人を介して問い合わせたのに対して、台南市政府側の教示してくれた内容である。
- 51) 台南市内にもうひとつあるかもしれないというので、何人かの道士、法師に尋ねたが、はっきりしなかった。仮にあるとしても、市内建業街にある臨水夫人廟ほどさかんではないのだろう。
- 52) この女神の機能は臨水夫人と同じである。台湾でことに信仰されているといい(窪徳忠『道教の神々』、平河出版社、1986年、104頁)、その臨水夫人との境界ははっきりしない。数の上では註生娘娘のほうが多い。このことは臨水夫人廟が少ないことの理由にもなる。そしてまた両者をあわせてみると、台湾社会でいかに求子のための女神崇拝がさかんであったかが知られる。
- 53) 劉枝萬『中国道教の祭りと信仰』下、桜楓社、1984年、412頁。これによると、撰者も未詳。
- 54) この解説は台湾で出版された『臨水平妖伝』(後述)に付されたものである。
- 55) 清の中期に、何求により編纂されたもので、小説形式で福州の社会生活を全般にわたってえがいている(葉明生『民俗曲葉叢書閩西上杭高腔『傀儡與夫人戲』、財団法人施合鄭民俗文化基金会、1995年、161頁)。
- 56) 『臨水平妖伝』耀古堂三元地理揮日館、(刊行年無記載)、1頁。
- 57) 窪徳忠『道教の神々』、平河出版社、1986年、215頁。
- 58) 徐曉望『福建民間信仰源流』、福建教育出版社、1993年、332頁。
- 59) 同上、徐曉望『福建民間信仰源流』、334頁。
- 60) 同上、徐曉望『福建民間信仰源流』、329頁。
- 61) 同上、徐曉望『福建民間信仰源流』、332頁。
- 62) 前引徐曉望は閩の地に古来、太老山、太母山という信仰の山があることをあげつつ、この地に古代から「母親崇拝」があったと述べ、それが後世の嫡祖や臨水夫人の信仰の母胎となっていくこと、また各種の伝承において女性が男性を圧倒することの淵源であるという(前引、150-152、329、337頁参照)。さらにこの延長上には観音を女神として信仰することも位置づけられる(同書、443頁)。
- 63) 『臨水夫人媽簡介』、臨水夫人媽廟、7-8頁。
- 64) どこの廟にいても、金紙は必ず売られている。金色の紙銭で、各種のかたちのものをひとまとめにしてある。これをどのくらい買うかは、人によって異なるが、通常の参詣のときは150元から200元でいど出費する。200元は、換算すると800円弱だが、使い勝手としては日本の2千円ほどの額である。
- 65) これは、伝統的には女の子を意味する赤い花を男の子を意味する白い花に取り換えることで

- ある。ただ、ときには白い花を赤い花に換えることもあるという。
- 66) 打城のばあい、依頼者は童乩や厄姨にまず相談し、そのあといっしょに道士のところへいくのがふつうである。
- 67) この科儀書に対応する「落嶽探宮科」が国分直一により邦訳されている（国分直一『壺を祀る村』法政大学出版局，1981年）。
- 68) これは林俊輝本人のことばである。一般に法事においては、時間のかかる段は短縮あるいは省略される傾向がある。これは、現在の台湾を代表する長老級の道士である陳榮盛の法事においても確かめられた（後述）。
- 69) 紙細工ではあるが、それらしきものが作られてある。
- 70) 林俊輝のもとには『梗花標科儀』という書があるので、この語は道士の用いる正式な語とおもわれるが、他書にはみられない。劉枝萬は、同じ内容のものを「進花園」の巫術と一般化し、さらに「供花脚」という語を提示した（前引、劉枝萬『中国道教の祭りと信仰』下，381頁）。しかし、林俊輝はこの語を用いないといった。
- 71) 金紙は廟の入口であらかじめ買っておく。その代金、少なくとも数百元は臨水夫人廟の収入となる。
- 72) 咸豊10年（1860）刊の『星平要訣百年経』（徐瀛洲所蔵）の版本によると、小児の関煞燻は32種類もあげられていて、そのそれぞれに対応の仕方が略記されている。これは占い師などが用いた本のものであるが、中国の法師はこうした占いに基づいて除厄の儀を施したのであろう。
- 73) ここでこの赤子は、この世の母親だけでなく、臨水夫人の加護を受ける者となったということが約束されるのである。
- 74) 可児弘明「誼子の慣行について」『史学』第四十七巻第一・二号，1975年，8-9頁。
- 75) 可児弘明は、原文の「又恐前世父母十二婆神交攻」の箇所から、前世父母と十二婆神の両者が互いに相剋するとするが、それは当たらない。この両者は一体となって現世の花児の成長に影響を及ぼしているのだと解すべきである（1999年9月、陳榮盛の筆者への教示）。また十二婆神は産を助ける女神で、上記事例のなかの三十六婆姐に相当するカミであろう。臨水夫人とのかかわりのなかではあまりみられない。
- 76) 現在でも台南の開隆宮などでは、男女が16歳になると、成年に達したことを祝う通過儀礼が旧暦7月7日に盛大におこなわれている。1999年からは臨水夫人廟でもはじまり、男女、多数の参加者がある。
- 77) 前引、劉枝萬『中国道教の祭りと信仰』下，380頁。太字は野村による。
- 78) 原初の百花橋の所在はそう明確ではなかったとおもわれる。道教の影響を強く受ければ「上界」となるであろうし、童乩や法師の影響下では「地府」となるであろう。また済州島では類似のところを「西天花畑」ともいう。これらを要するに、百花橋や花標はこの世でないところ、河や海を越えたところに位置していたというべきだと考える。そしてそれは原初の「あの世」つまり「死」の所在と同じ範疇にあった。
- 79) 前引、『臨水夫人媽簡介』，1-2頁。この典拠は清の時代の『閩都別記』のようである。そこでの描写は長大で、陳靖姑の伝奇部分だけでも20万字にのぼるという（徐曉望『福建民間信仰源流』，福建教育出版社，1993年，335頁以下）。臨水夫人廟は清代に大いに発展した。その廟に三十六宮婆姐をまつることなども清の時代になってからのことのように見える。これらはもともと

台湾人の儀礼と「物語」(二)

は閩およびその周辺地域の女神たちであった。この地域の女神崇拝、ひいては女性の巫俗への傾倒は中国のなかでも特異な様相を帯びている(同書、337-338頁参照)。

- 80) 前引, 徐曉望『福建民間信仰源流』, 342頁。
- 81) 鈴木正崇・野村伸一編『仮面と巫俗の研究』, 第一書房, 1999年, 338-339頁参照。
- 82) 「花の舞」や「花育て」の花とは新しい生命のことであろう。



図版 48 三奶夫人の右側にまつられる註生娘娘。子授けの女神。これは廟の入口をは  
いってすぐ右側にあるものだが、奥の空間にも黒い色のこぶりの像がまつられている。



図版 50 三十六宮婆姐の神壇（神像と神名を記した名札のようなもので36のカミを表現）とその前に並べられた供物。卓上にみえる箱形の拵え物は関煞の象徴物で儀礼の途中でこわされる。その左には天狗，五鬼，白虎などの星君の拵え物，またカミに上げる金紙などがみえる。小法事で星祭をするとき，法師はこの神壇に向かう。



図版 47 台南市臨水夫人廟の正面にまつられる三奶夫人（臨水夫人）。後段上部に肌色の三奶夫人像（図では中央の陳靖姑と右側の林九娘の顔がみえる）があり、さらにその下の段に黒い色の三奶夫人像がまつられている。子授かり、出産のほか、子供にかかわるもろもろの願いをかなえる女神。三奶夫人はこの奥の空間にもまつられている。そこでは毎日のように法事がおこなわれる。この女神信仰は福建、浙江、江西省などの地に広がっている。



図版 49 花園を管理する花公（右）花婆（左）。この像は廟内奥の法場にまつられているもの。花公花婆は生命の源である花園をみまもる原初の夫婦で、臨水夫人以前の存在であったかもしれない。



図版 63 裁花（送花または種花）。祝福の最後は子宝を意味する花を授与されることである。白い花は男の子、赤い花は女の子。花一つ一つが生まれいづる子という観念がある。



図版 51 花公（右）花婆（左）のみまもる花櫛。中央に造花の花がみえるが、傷んだ白い花ふたつはすでに折り曲げてある。花櫛は米のはいた盆の上に置かれる。これは陰間における女性の生命力の象徴である。



図版 52 蛇の頭を付けた法索。頭上に「太極」と記されている。煞を追いやる鞭でもあり、また五方の兵をよび集める力があるともいう。法師や道士はこれを巧みに振って儀礼を進める。



台湾人の儀礼と「物語」(二)



図版 53 造橋。林俊輝道士が七星剣を振るいつつ橋を巡って煞を祓う。



図版 54 橋が通過できる状態になったところで、儀礼を依頼した母と子がよばれる。



図版 55 過橋。道士に導かれて百花橋を渡る。これにより靈魂の活性化がはかられる。



図版 56 開限城。道士が関を七星剣で破り、そこに閉じこめられた替身を取り出す。



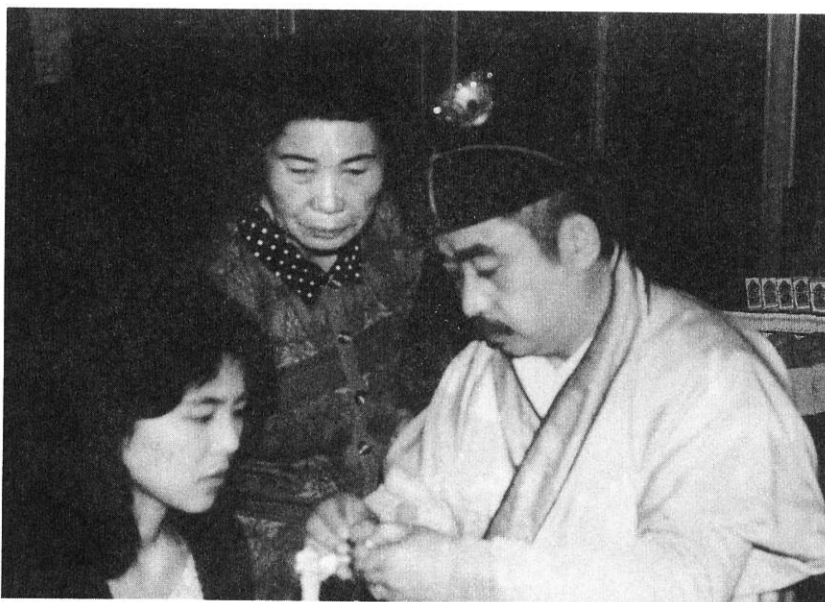
図版 57 祭改。体内の悪しき気を吐き出して衣服に吸収させる。



図版 58 法師は法索を振るって辺りの煞を押さえる。



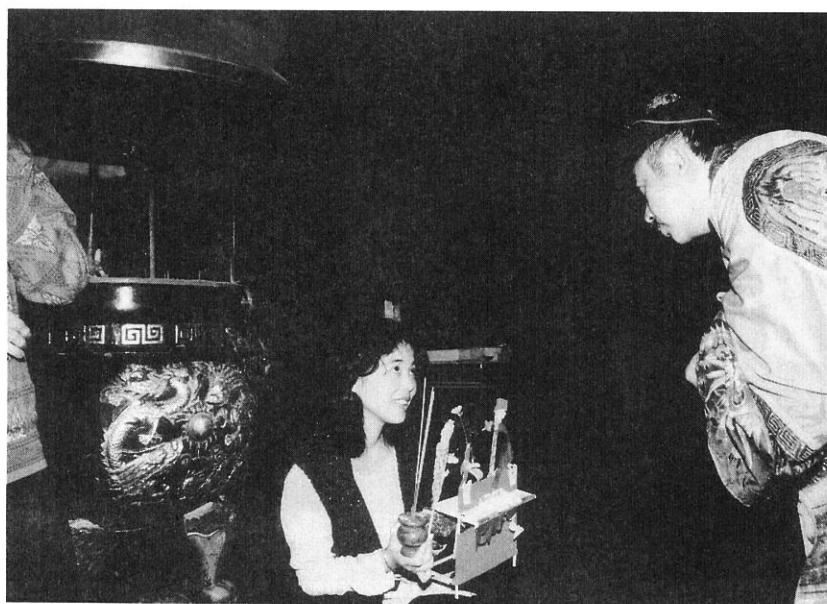
図版 59 依頼者が花籠を抱えて百花橋の端にすわる。



図版 60 道士は依頼者の目の前で傷んだ花を折り曲げて処置する。こうしてこそ新しい生命が育まれる。



図版 61 林俊輝の用いる科儀書「梗花穢科」の一部。



図版 62 依頼者の女性は花壇を整えてもらったあと、道士から祝福を受け頬笑む。非常に印象的な光景である。



図版 64 道士はあらかじめ準備した芙蓉を依頼者に贈る。これをイエに持ち帰り、だいに花育てをすれば、まちがもなく子供が生まれるという。



図版 65 請神。子供の健康祈願にくるとき、依頼者の側でまつる禅師菩薩を神輿に乗せて連れてくる。祈願する者のまごころを示すと同時に、祈願の実現をより確かなものとしたということなのだろう。



図版 66 過橋。すでに生まれた子供の煞をのぞくためにも百花橋の通過が必要である。母親のあと、主役の赤子も橋を渡る。



図版 67 抽刀箭。赤ん坊の体内には弓矢があって、これが祖父母あるいは本人にとっても危険だという。そして道士がこれを取り出し断ち切る。図は道士が断ち切った弓矢を母親に提示しているところ。



図版 68 赤子の体内に潜む悪しき気を爪のあいだから出させる。左足の指に処置を施している。

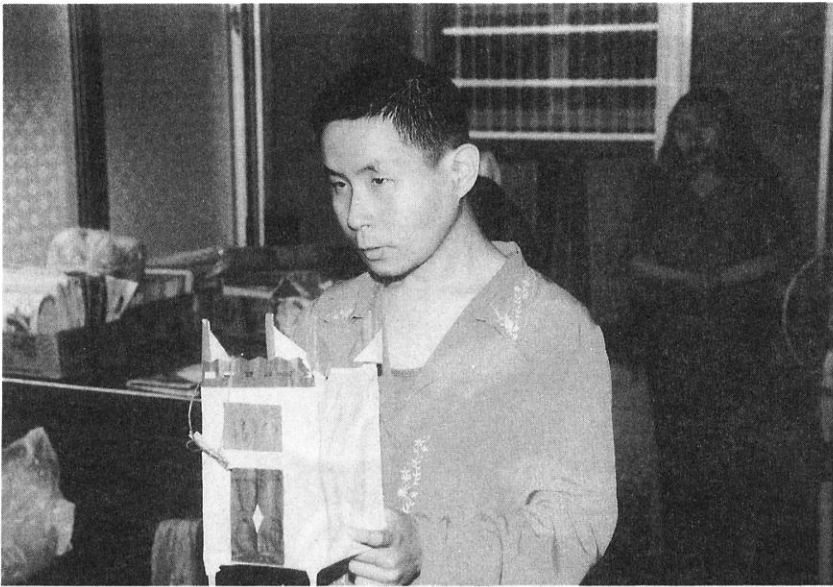


図版 69 林俊輝道士が誼子書を読む。煞を除かれた赤子は神の子孫として生まれ変わったということを宣言する。





図版 70 林俊輝道士の請神。依頼者は過去に元辰を失った青年とその母親。林俊輝道士が帝鐘と五雷令を持って請神の儀をする。



図版 71 祭関限。青年の関煞を取り除く儀がはじまる。限城の左隅に弓矢が掛けてある。



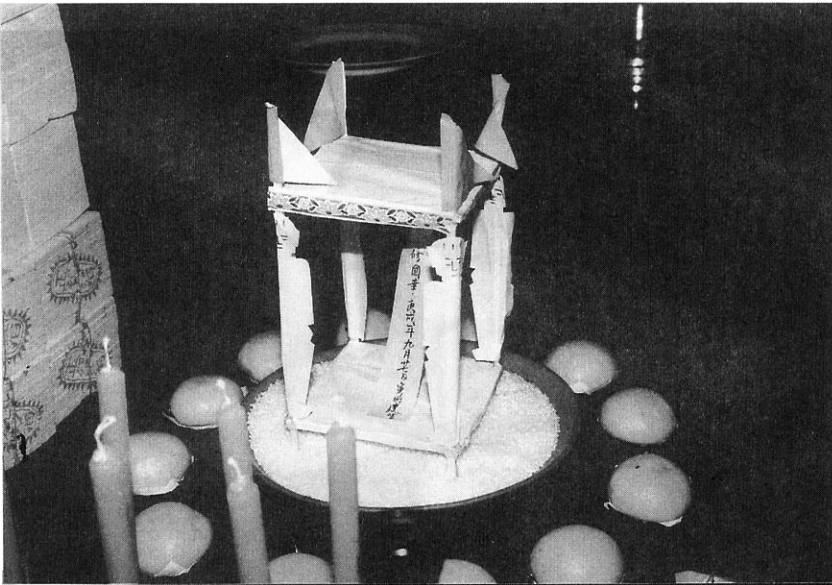
図版 72 開限城。弓矢が煞なのであり、道士はこれを取り、また限城から替身を取り出す。



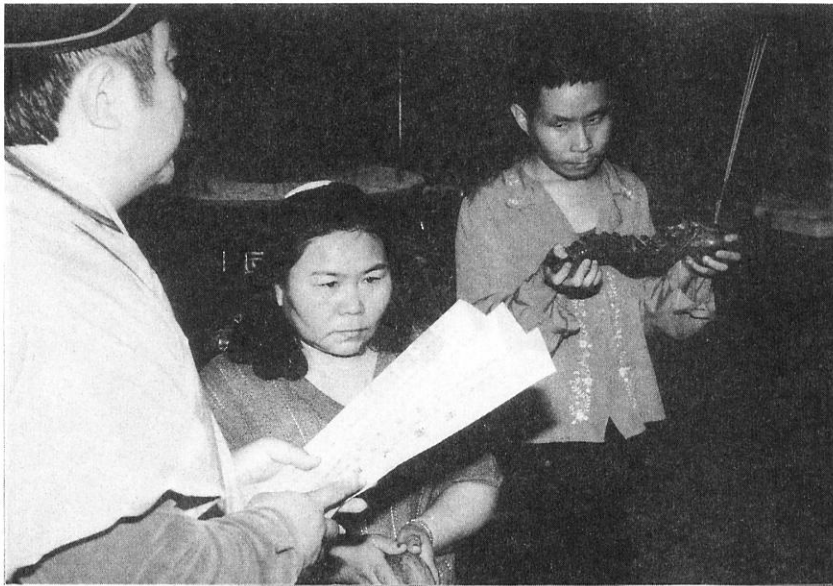
図版 73 斬刀箭。弓箭を断ち切る。



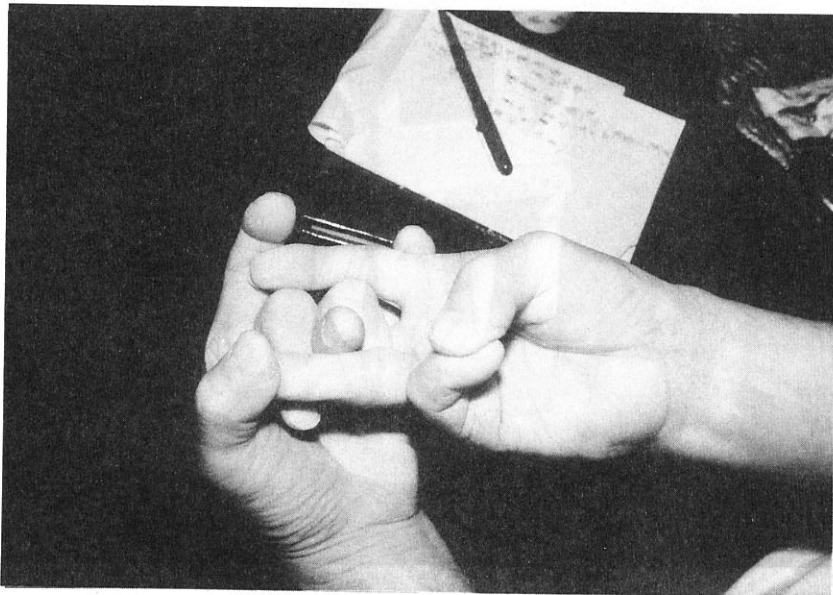
図版 74 青年の体内の悪しき気を吐き出させる。この人形は棄てられる。道士は人形と衣服の包みの下に法索（法繩）を持っている。



図版 75 梗四柱。元辰（元氣）が新たにされたことが確認される。七本の蠟燭は光明灯，元辰を象徴する十二個の餅が四柱を取り囲む。



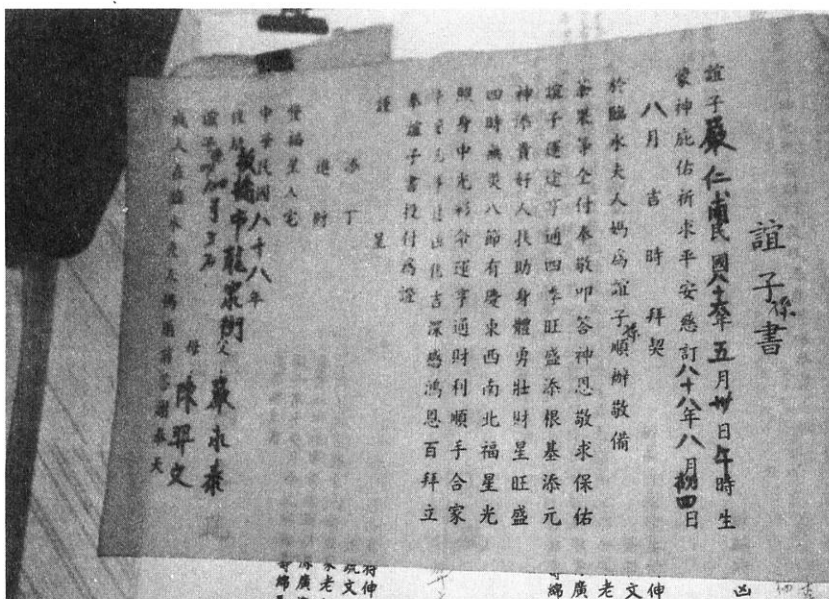
図版 76 一連の儀の後、道士が臨水夫人の前で疏文を読んで母親と青年を祝福する。



図版 77 林俊輝道士の点指。消災改厄をより確かなものとする。



図版 78 「買断」の儀のために嬰兒を抱いて臨水夫人廟にきた父子。左手に帝鐘を持って振るのは紅頭法師。臨水夫人廟の法場は狭いが、ふたつの儀礼が同時に進行することもある。



図版 79 林俊輝の用いる赤い紙に記された誼子書。

